

3. 豊かな自然体験と絵本のかかわり 江戸川双葉幼稚園(東京都江戸川区)

センス・オブ・ワンダー(神秘さや不思議さに目を見張る感性)、つまり不思議心にあふれて人生を歩みだし、生涯にわたって、その感性に満ち満ちてすごしてほしい。そんな願いを込めて、私たちの教育理念は、自然とのかかわりを根底に据え、豊かな自然体験を元に、それを整理統合できるような科学絵本や心を耕す優れた絵本に絶えず身近に接することができるように、自然とのかかわりと絵本体験を大きな柱として保育計画を組み上げている。

【春のエピソード①】 「アゲハの幼虫、見つけたよ！」

「見て! アゲハの幼虫!」「これはクロアゲハだと思うよ」「脱皮したよ」「さなぎになるんじゃない?」と、観察は続き、その成長を楽しんだ。幼虫の模様の違いなどからアゲハの種類を予想したり、絵本や図鑑と首っ引きで虫談義に花が咲く。

先生に絵本『あげは』や『おおきくなったらなにになるの?』を呼んでもらったり、ライブラリーから『ちょう』を借りてきて見比べたり……。年長になると、それまでの経験から、それぞれの蝶の食草の地がことなどもわかってくる。人参のキアゲハも含め、今年も約20匹の蝶を羽化させることになった。



【春のエピソード②】 「カマキリの赤ちゃんが生まれた！」

5月半ばにカマキリの卵囊から、糸につながったような小さなカマキリの赤ちゃんが誕生した。登園してきた子供たちとそのお母さんたちが、固唾を飲んで見守る。こんな小さいのにしっかりとカマキリの姿をしている!そしてそれぞれに散らばってゆく。

「カマキリのお母さんは?」と問う子もいる。そう、カマキリの赤ちゃんは一人で生きていかななくてはならないのだ。『162ひきのカマキリたち』と同じ場面を最近では毎年のように観察できる。

一個の卵囊から200匹前後のカマキリの赤ちゃんが生まれる。ここで生みつけられた卵囊と、野原から取ってきたものと合わせて3~4個から生まれたたくさんの子供のカマキリたち。時折見せる大きくなってゆく姿に感動する。



【エピソード③】 子どもの「なぜ?」に寄り添って

「すなってなーに?何でできてるの?」

子どもの問いには、時として、実に深い真理に迫るものがある。本当のところ「砂」って、「土」って何なのでしょう。私たちはこの問いに真剣に答えようと思った。そしてまずスイカを食べた後の皮を地面に埋めることから始めた。子どもたちに見せながら一緒に行くことにした。

夏休みが明けて2学期を迎えた時、「あのスイカどうなった?」と思い出してくれた子の一言をきっかけに、木の下に埋めた辺りを手に手にシャベルを持って掘り返し始めた。何本かヒョロヒョロとスイカが芽を出していたが、そんなことはお構いなしに、「あれ?ない」「確かにこの辺」と相当広い範囲まで掘ってしまった。それでも、ない。「なくなっちゃったんだ」「溶けちゃったんだ」子どもたちは口々に言い、だんだん核心に迫ってきた。そこで科学絵本『くさる』を読み聞かせる。何気なく踏んでいる土や砂でも、そこからずっとずっと昔の恐竜にまで結びつくような命のつながりがあることを知り、動物や植物、大好きなだんご虫やミミズや、そして目に見えない小さな生き物たちへの命のつながり(生態系・食物連鎖)を感じるきっかけになる。「ああそうか」と深く納得しながら聞き入る子どもたちの表情が、知る喜びに輝く。

自然とのかかわりで使う絵本リスト

■ 春から夏へ、草花虫との関連で

- 『ちょうちょはやくこないかな(甲斐信枝さく)』
『きいろいはなみつけた』(甲斐信枝さく)
『おーい、めだか』(島津和子さく)
『てんとうむしのとん』(得田之久さく)
『かまきりのちゃん』(得田之久さく)
『昆虫 ちいさなかまたち』(得田之久さく)
『きゃべつばたけのぴょこり』(甲斐信枝さく)
『モンシロチョウはなにがすき』(藤井恒ぶん たかはしきよしえ)
『たんぼぼ』(平山和子さく)
『つくし』(甲斐信枝さく)
『にわさきのむし』(小林俊樹ぶん たかはしきよしえ)
『あげは』(小林勇さく)
『きゃべつばたけのいちにち』(甲斐信枝さく)
『ちょう』(大島進一さく)
『おおきくなったらなにになるの?』(島津和子さく)
『いちご』(平山和子さく)
『かたつむり』(得田之久さく 1984年年少版こどものとも)
『かたつむり』(夏目義一さく 1997年かがくのとも)
『よもぎだんご』(さとうわきこ作)
『たべられるしょくぶつ』(森谷憲ぶん 寺島龍一え)
『ざっそう』(甲斐信枝さく)
『おいしい野草』(高森登志夫え 丸山尚敏ぶん)
『はるのたんぼ』(菅原久夫ぶん 高森登志夫え)
『すみれとあり』(矢間芳子さく)
『ぼく、だんごむし』(得田之久ぶん たかはしきよしえ)
『かぶとむしはどこ?』(松岡達英さく)
『木』(佐藤忠良/画 木島始/文)
『かまきりのこどもがうまれた』(得田之久さく)
『162ひきのカマキリたち』(得田之久さく)
『ピーナッツ なんきんまめ らっかせい』(こうやすずむ文)
『だいち えだまめ まめもやし』(こうやすずむ文)
『さつまいも』(小宮山洋夫さく)
『みずのなかのちいさなせかい』(三芳悌吉さく)
『ざりがに』(吉崎正巳さく)
『野の草花』(古矢一穂ぶん 高森登志夫え)
『たねがとぶ』(甲斐信枝さく)
『たねのりょこう』(ウェーバー作)
『花がえらぶ 虫がえらぶ』(山下恵子ぶん 松岡達英え)
『野菜の花が咲いたよ』(北篠純之文・写真)

■ 虫歯予防デーや足型取り、からだ・健康関連

- 『ははのはなし』(加古里子さく)
『ちのはなし』(堀内誠一さく)
『みんなうんち』(五味太郎さく)
『あしのうらのはなし』(柳生弦一郎さく)
『おへそのひみつ』(柳生弦一郎さく)
『おっぱいのひみつ』(柳生弦一郎さく)
『からだのなかでドゥンドゥンドゥン』(木坂涼ぶん あべ弘士え)

■ かいこや綿との関係で便利な本

- 『かいこ』(熊谷元一さく)
『わた』(宮川桃子ぶん 今井真利子え)
『ペレのあたらしいふく』(ベスコフ作)
『つるにようぼう』(矢川澄子再話 赤羽末吉絵)

■ 梅雨の頃に最適の本

- 『しぶくのぼうけん』(テルリコフスカさく 内田りさこ訳)
『かわ』(加古里子さく)
『かわはながれる』(ロジャンコフスキーえ 岩波書店)
『あめのひ』(シュルピッツ作 矢川澄子訳)
『みず』(長谷川摂子文 英伸三写真)

■ 土や生命・死についての本

- 『くさる』(なかのひろたか作)
『せいめいのれきし』(バートン作 岩波書店)
『わすれられないおくりもの』(スーザン・パーレイ作 評論社)
『ずーっとずっとだいすきだよ』(ウィルヘルム作 評論社)
『葉っぱのフレディ』(レオ・パスカーリア作 童話屋)

■ 秋から冬そして春を待つときに最適

- 『たべられるきのみ』(菅原久夫ぶん 高森登志夫え)
『ぼくはたね』(甲斐信枝さく)
『ひやしんす』(平山和子さく)
『ふゆめがっしょうだん』(富成忠夫 茂木透=写真 長新太=文)
『かれくさつみ』(あきやまじゅんこ作)
『ぼとんぼとんぼはなんのおと』(神沢利子さく 林明子え)
『ゆりかもめ』(石部虎二さく)
『ふきのとう』(甲斐信枝さく)
『ゆきどけみず』(野坂勇作さく)
『冬の虫冬の自然』(たかはしきよし絵 奥本大三郎文)

■ 作って遊ぶとき

- 『ほねなしカイト』(蒲倉一郎発明)
『つくってあそぼう』(大隈紀和構成)
『しゃぼんだまとあそぼう』(杉山弘之 杉山輝行)
『たこ』(加古里子さく)
『かみひこうき』(小林実ぶん 林明子え)
『あきかんでつくろう』(よしだきみまる作)
『いとでんわ』(小林実ぶん 荒木桜子え)

■ 飼育・栽培に関して

- 『育てて遊ぼう』シリーズ全巻(農文協出版)

※出版社名のないものはすべて福音館

ポイント

都会の中の小さな園庭に、様々な工夫によって自然を育み、自然体験を大切に活動が豊かに行われています。長年にわたって集められた、自然と関わる様々なジャンルの絵本が、すぐに使えるようにライブラリとして、わかりやすく整備されています。そして、これらの絵本が日々の実践の中で、とても効果的に活用され、子どもたちの不思議心が育まれています。